

世阿弥から学ぶ「老いてのちの初心」

先日、久しぶりに静岡能を楽しんだ。「能」は、今からおよそ600年前の室町時代に、世阿弥によって大成されたと言われている。この世阿弥が書き遺した能楽論が「風姿花伝（ふうしかでん）」だ。読んでみると意外に分かりやすく、しかも新鮮である。

「風姿花伝」を始めとする多くの著作は、演劇や芸術についての考えが述べられたものだが、世阿弥の言葉は現代の私たちにとっても有効なメッセージを伝えてくれている。

世阿弥の名言「初心忘るべからず」紹介しよう。世阿弥は、若手として独り立ちしたころの「初心」を忘れるなど説いた。さらに世阿弥は、若い頃の「初心」とは別に、中年や老年になっても、新たな「初心」が生まれると語っている。世阿弥の言う「初心」とは「若い頃の最初の志」という単純な意味ではないのだ。「初心忘るべからず」という言葉には三つの初心があるという。

■**是非初心**：若年の初心。これまでの失敗を知ることが、これからの成功の基となる。

■**時々初心**：初心より年盛り、老後に至るまで、その時々自分に合ったものを手がけるだけでなく、それまでに行ったものもいつでもできるものとする用意がある。

■**老後初心**：命に終わりはあるが、能には果てがない。老後になっても新たな取り組みを。老後には老後の芸を。五十有余よりは「せぬならでは手だてなし」＝しないているしか方法がないほどの困難なことに取り組み。

世阿弥がこのように考えるに至った背景には、父、観阿弥の存在がある。観阿弥は、52歳で亡くなる15日前に、静岡市の浅間神社で奉納の能を舞うのだが、動きが少なく控えめなその舞は、いよいよ花が咲くように見え、見物客も賞賛を送ったと言う。まさしく、「老木(おいき)に残る花」だったのだ。

それぞれの年齢というものは、その人にとっては初めての体験であり、年代ごとに初心ありということなのだろう。超高齢社会の日本において、「老いてのちの初心」という言葉はとても重要な意味を持つ。寿命が延び、体力的にも元気なお年寄りが増えている。そういった人たちが、どう老いてのちの花を咲かせるのか。私は、個人がそれぞれに自らの初心を考えるのと同時に、社会の側でも老いてのちの花を咲かすことのできるシステムを積極的に準備すべきだと考えている。

静岡県議会議員
天の一